

野原万里絵／咲くやこの花インタビューvol.45

野原万里絵(のはら・まりえ)【令和 6 年度 美術部門[現代美術]】



レジデンスやワークショップの交流も糧に 「どう描くか」思考の果てに生まれるアート

絵画の制作過程に焦点を当て、線や面を描くための定規や型紙を自作し、多数のドローイングを起点とした絵画を描く野原万里絵さん。2012 年に Royal College of Art 交換留学で渡英し、2013 年に京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻(油画)修了。卒業後も積極的に展覧会を開き、新潟や青森などで滞在制作をしてきました。

「近年はワークショップを開催し、協働制作による作品も発表、他者と自身を行き来しながら制作することで、絵画の新たな可能性を模索している。大阪を拠点にさまざまな表現の場に挑戦しており、今後も大阪の美術の振興に大いに寄与するものと期待される」と受賞理由にあるように、野原さんの絵の制作の起点は「考える事」にあります。

取材・文／岩本和子

野原さんオリジナルの「御道筋定規」に出会うまで

「咲くやこの花賞」受賞、おめでとうございます。受賞をお聞きした時のお気持ちを教えてください。

「大阪市です」とお電話いただいて、何だろうと思って。推薦していただいたとは聞いていたのですが、受賞のお知らせを聞いた時は嬉しかったです。

絵画との出会いをお聞きしたいのですが、野原さんはどういうきっかけで絵の道に進まれたのでしょうか？

そもそも芸大に入ろうかなと思ったのが高校 3 年生の時でした。高校の授業で美術を選択していて、高1から授業で油絵がありました。その時から美術の先生が褒めてくださったり、気にかけてくださって、「美術部に入らへんか」と声をかけてくださったのが最初のきっかけでした。当時は別の部活に入っていたので、部活後に夜だけ描きに行かせてもらって。それから画塾を紹介してもらって、高3でデッサンを始めたという感じです。

別の部活というのは？

吹奏楽をしていました。高校の途中まではどちらかという音楽に関心があったので、4歳から高2までピアノをしたり、中1から高3までフルートをしたりと、音楽の方が身近な存在でした。でも絵を薦めてもらって、「そういう世界があるんだ」と思って。



美術の授業はいかがでしたか？

それまでは水彩とか、アクリル絵の具を使っていたのですが、初めて油絵を描いた時に、画材が変わるだけで描けるものがこんなに広がるんやと思って、すごく楽しかったです。乾きが遅いので、次の日や1週間後にもまだ絵の具を動かしながら考えられるのも、魅力的でしたね。

高校 3 年生で美術の学校に進もうかなと。思いきって方向転換されましたね。

そうですね(笑)。美術の大学のことも何も知らなかったのが、薦めてもらって、「じゃあ、そこに行こう」という感じで、一浪して京都市立芸術大学に行きました。

入学してからはいかがでしたか？

高校の時も課題があって絵を描いていたので、課題があるうちはできていたのですが、大学2回生の

後期の頃に油画専攻では課題がなくなって、「何でも描いていいよ、自由だよ」となった時に、何も描きたいものはないなと思って。最初は自分が何をしたいか見つけるまでがしんどいなと思っていました。

そこからどう行動されたのでしょうか？

大阪に住んでいたのも、身近な景色を描こうかなと思って、道頓堀の看板を描いたりしていました。今になって「なんで看板を描いたんだろう」と思うのですが、当時も全然楽しくないなと思いながら描いていました(笑)。道頓堀の風景画を失敗して、何を描くかじゃないんだと思って。それで、どう描くかを考えようとシフトチェンジしました。でも、どういう線を描いたらいいのかすら分からなくなっていたので、フリーハンドで描くのではなく、文房具、いわゆる愛着がある道具ができれば自分の線が描けるし、何度も同じ線を描くことができるんだということに気がつきました。幼い時から、消しゴム集めをしたり、文房具が好きだったことも影響していると思います。



「御道筋定規 No.5」アクリル板、280×200mm
2009 年
大学3回生時に制作

そうなんですね。

それで、今度は大阪の御堂筋沿いを歩いて、写真を撮って、その景色をトレーシングペーパーに写して、線を組み合わせて「御道筋定規」というものを作りました。その定規で東京タワーを描いたり、別の都市の象徴的なモチーフも描いたりして。そこで「御道筋定規がいくつもあったら、何でも描いていいやん」という気持ちになって、そこから結構広がっていきました。

発想が面白いですね。

画材屋さんに行くと、いろんな雲型定規を売っていたのですが、人が作ったものなので愛着が湧かないなと思って。自分の足で、その時しかない風景から集めた線で定規が作れたら素敵だなと。それで

御道筋定規をアクリル板で作りました。今はフリーハンドで描けるようになってきたので御道筋定規は使っていませんが、結構長く使いましたね。サイズも拡大縮小をかけて、枚数も結構あります。最初に作ったのでも6個ぐらいあって、街の景色が変わるとまた作っていました。

果物の皮をかたどった線の作品もありましたが、それも御道筋定規から派生したものでしょうか？

そうです。御道筋定規から10年ほど経って、次は新潟でのレジデンスで「果物の静物画」を描きたいと思って、果物の皮の剥き方をモチーフにした木型を作りました。新潟の方と一緒に、りんごやバナナなど5種類の果物の皮を、カッターやハサミを使って普通じゃない剥き方で剥き、皮の輪郭をなぞって型紙にしました。最終的には糸鋸を使って木型にして、それを道具に絵を描きました。型紙や定規は制作する上でのキーワードとなっているものなので、型はモチーフを変えながら発展しています。

交換留学先で久々に感じた絵の楽しさ



RCA でのドローイングの様子
2012 年

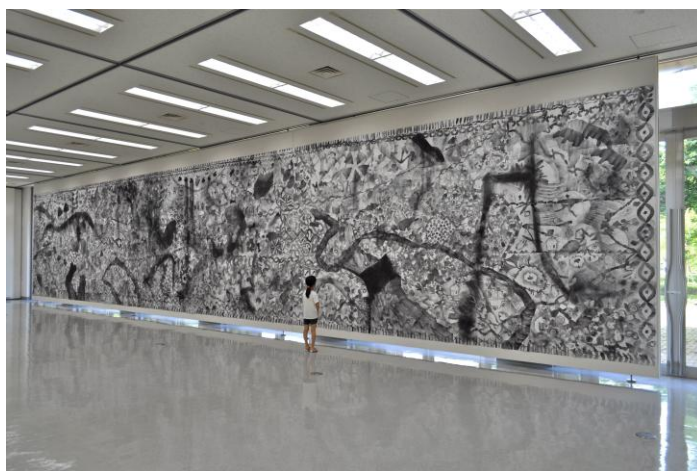
2012 年に Royal College of Art へ交換留学でイギリスに行きました。どのくらいの期間だったのでしょうか？

ロンドンに住んだのは5ヶ月、RCAには3ヶ月通いました。ペインティングではなく、ビジュアル・コミュニケーションという専攻に入ることになりました。そこはビジュアルデザイン、写真、イラストレーションなどを専攻する人たちが集まる場所で、ペインティングの作品を作っている人はかなり少なかったです。基本的にはビジュアル・エディションという授業で本を作ったり、編集をしたり、いわゆる描くという行為は少なかったですね。ディスカッションもすごく多くて、もちろん英語なので内容も難しくて、全部を理解できませんでした。でも、放課後にドローイングの授業があって、そこでかなりの枚数をドローイングしたり、目の前のものをシンプルにどう描くか考えることで、久々に「絵を描くのは面白いな」と思いました。それから結構、開放的になったり、いろんな方の意見を取り入れたりしながら作るのも悪くないなと思って。そこで意識を変えましたね。

意識を変えたというのは？

帰国して1ヶ月後に卒業制作だったのですが、何を描きたいかは重要じゃなくて、どう描きたいか考えていくべきと思って、地元の人や知らない人のお家や、庭にあるもので絵を描きました。「絵を描くモチーフを探しています、何かいただけませんか？」と言って、庭にあるうさぎの置物、ハワイのお土産などをいただいて、それを写真に撮って、データをパソコンに取り込んで輪郭を検出して、ランダムに組み合わせて、そこでできたものを部屋の形に組み立てて、模型を見ながら部屋中にガムテープで線を這わしていくというものです。それが初めてインスタレーション(展示空間を含めて作品とみなす手法)で作ったのですが、「自分の意思をほとんど入れずに、絵画は作れるかもしれない」ということも考慮して、自分で線を描くことを制限していました。自由を制限するルールを作ることによって、自分はこういう線が描きたかったのかと、だんだん分かってきました。

その土地でしか得られないものを求めて



「黒をめぐる話」
紙に木炭、3.5×18.0m
新潟市新津美術館市民ギャラリー
2017年

卒業後はどのような活動をされていたのでしょうか？

卒業後はいろんな展示が続いていたのですが、初めてレジデンスにも行きました。限られた期間の中、初めて住む街で自分は何ができるか探るのはレジデンスならではの面白さとしてあるなと思って。旅行では得られない経験をしたいと思って新潟、青森、北海道に行って。奈良もそうですね。

各都市ではどのように過ごされましたか？

新潟市の小須戸という町は、商店街にある町屋が滞在施設になっているので、そこで毎晩、地元の人にお世話になっていました。最終的には布団屋さんのお家にずっと泊まったりして(笑)。小須戸は3年ぐらい毎年行っていて、新潟市新津美術館の市民ギャラリーを使わせてもらえるようになったので、そこで木炭で巨大な絵を描いたり、いろんな実験をさせてもらっていました。「こういうワークショップをやったらどうかな」とか、いろいろ相談に乗ってもらったりして、それが今の協働制作にもつな

がっていると思います。

青森や北海道も、その土地ならではの過ごし方で。

青森では安藤忠雄建築の国際芸術センター青森に滞在しました。国内でも有数のレジデンス施設ではないかと思います。生活面もかなり手厚くフォローしてくださって、どこ行くにも車を出してもらって、至れり尽くせりという感じでした。奈良の明日香村でのレジデンスは一軒家で、3 人の作家で共同生活をしていたので、またそれも違うタイプのものでした。レジデンスといってもいろんなスタイルがありますね。

顔料を求めてインドにも行かれたそうですね。

はい。一人で約 1 カ月行きましたが、初インドでした(笑)。お湯が出ない地域は数日間水シャワーで寒かったり、コンセントが爆発したりと、1日生活することだけでも大変でしたが、2018 年だったので、コロナ前のタイミングで行ってよかったなと思います。野菜等を粉末状にした天然の顔料を求めて行ったのですが、いろんな工房を回ってみて、ちょっと違うなと思い始めて。それからすぐプランを変えて、残りの日は遺跡を巡ったりしていました。世界遺産の「クトゥブ・ミナール」という遺跡も観て、得られるものがありました。



インドに滞在中、ドライバー(写真右)との写真。
2018 年

インドに行くと人生観が変わるとよく聞きますが、野原さんにとってインドはどんなところでしたか？

なんて言うのか、着いた瞬間から違う星に来たみたいな感じでした。とりあえず首都に着いて、「ここ

が首都か…」という感じで。最初はずっと鳴っているクラクションの音に慣れずに、なんか大変なことになったなと思ったのですが、日本国内でもそうですけど、「なんかここ、雰囲気合わなさそうだな」と直感的に思う場所ってあるじゃないですか。インドはそういう予感が全くなくて、2、3日して「大丈夫そうだな」と思って。デリーからドライバーの方がずっとついてくださっていたのですが、その方もめちゃくちゃ親切な方で。その方のおかげで快適に過ごせました。

絵と言葉、両輪で進めていくことが重要

野原さんの制作過程において、「考える」がキーワードとしてありますよね。

そうですね。もちろん言葉で考えるものもあるのですが、そこで取りこぼしていることは絵を描きながらでしか考えられないと思うので、絵を描いているうちに言葉を思いつくこともあったり、その逆もあったりして、言葉と絵の両輪で進めていくのが重要だなと思います。

言葉では表現しないのでしょうか？

そうなんですよね。今回(ニューあそび場の創造 vol.12 野原万里絵展「絵画になるまで」／新開地アートひろば)も、作品の横にメモとかを貼ったりするのはどうか？という提案はあったのですが。人ってどうしても言葉の方が正解と思うというか、私の作品は何を描いているか分からないものが多いと思いますが、だからといって作家自身があたかも正解かのように文字を自分の作品の横に展示するのは、すごく嘘くさい感じになると、実際に貼ってみて思っ。この世界では言葉の方が優先されますが、言葉で表すのは絵描きがやることなのかなと思って、結局、それはやりませんでした。



では、将来、目指す像はありますか？

芦屋市立美術博物館の展覧会で山田正亮を研究していたのですが、コツコツと長く描くことで見えてくることはすごくあるなと思って。山田正亮は華やかな活動ではなかったと思うのですが、絵と合わせて、膨大な量の制作ノートやメモの中でも熟考されている姿が素晴らしくて。私自身、最終的にどういう絵を描きたいかというのは、今は全然ないのですが、長く続けていったらどういう絵を描けるのだろうかという楽しみはすごくありますね。

長屋の軒先にある寄せ植えから見えるもの

最後に野原さんが大阪市に「咲くやこの花賞」を贈るなら何に贈りますか？

なんて言ったらいいのか分からないのですが、「長屋の前にある寄せ植えみたいなもの」です。あれは大阪市内にもまだ残っている独特な文化で、限られた家の前のスペースでめっちゃ凝ってつくられてるなと思うんです。卒業制作で長屋の方にいろんなモチーフをもらったというのもあるのですが、私の近所の家はアジサイの寄せ植えがすごく上手で、樽みたいな入れ物にアジサイがたくさん咲いていて。味噌が入っているプラスチックの桶みたいなものとか、ぬか漬けの容器みたいなものにアジサイを植えている家もあって、その工夫が、人に見られたいのか、自分のためなのか分からない、絶妙なところが素敵になって。無理がないっていうか。

アジサイから見えるものがたくさんありそうですね。

同じようなアジサイが同じエリアに点々と咲いているのを見ると、挿し木して広がっていったのかなと思ったりして。そういうコミュニティが想像しながら見えてくるから、嬉しくなるのかもしれない。多分、各家庭の工夫が好きなんだと思う。その家の中の感じもちょっと垣間見えるじゃないですか。それが道路を歩きながら、ふと目に入ってくるのが面白いのかなと思います。



[略歴]野原万里絵(のはら まりえ)

1987 年生まれ、大阪市在住。

2012 年 Royal College of Art (Visual Communication) 交換留学、2013 年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻(油画)修了。

近年の主な展覧会に、ニューあそび場の創造 vol.12 野原万里絵展「絵画になるまで」新開地アートひろば(兵庫、2024 年)、Kyoto Art for Tomorrow 2025 ―京都府新鋭選抜展― 京都文化博物館(2024 年)、Window Gallery in Marunouchi ― from AATM vol.2 行幸地下ギャラリー (東京、2024 年)、野原万里絵 ドローイング展「洞の絵」city gallery 2320 (兵庫、2024 年)、art resonance vol.01「時代の解凍」芦屋市立美術博物館(兵庫、2023 年)、VOCA 展 2022 現代美術

の展望—新しい平面の作家たち— 上野の森美術館(東京、2022 年)、大阪府 20 世紀美術コレクション
展「彼我の絵鑑」大阪府立江之子島文化芸術創造センター(2021 年)、個展「埋没する形象、組み変わる景
色」青森公立大学国際芸術センター青森(2020 年)など。
コミッションワークを、千島土地株式会社本社ビル北側外壁(大阪、2024 年)、九段会館テラスビジネスエ
アポート九段下(東京、2022 年)に恒久設置。

[作家 Web サイト]

<http://marienohara.info/>